

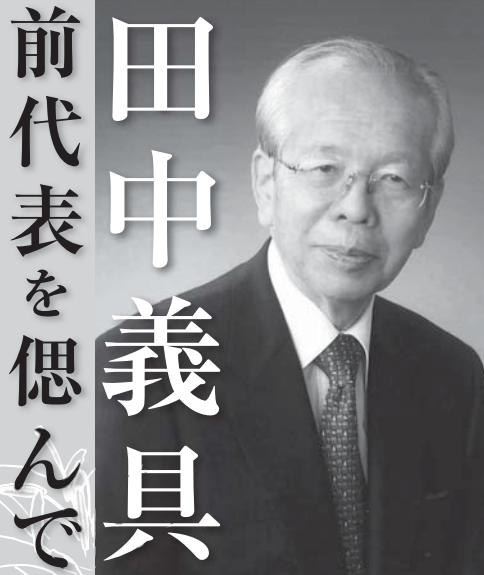
# 日本が生き延びていく道

3回目

日本はバブル経済の崩壊を経験し、自らの生活を守るのに精一杯で対外援助どころではなくなるような時期がしばらく続きました。一気にゼロにすることはなくても年々援助額は削減され、もともと日本に直接裨益するような対象に絞れという声が強くなりました。ま

先鋭化してくると、多くの途上国はそうした大同士の対立には巻き込まれたくないとの思いが先にたつて、日本への表立った支持も手控えるという動きにもなってくるのです。

21世紀という時代を考えてみたとき、中国が次第に台頭して国際的により大きな影響力



田中義具  
前代表を偲んで  
昨年6月20日に逝去されました前代表で顧問の田中前代表を偲んで、「現代の世界情勢と親切運動」と題した講演再録の3回目をお届けいたします。

を持つ国になっていくことは間違いないと思います。こうした時代に日本としてはどう生きていくべきかが問われていると思います。中国にはその国名が示すとおり、世界の中心にある国という気持ち

が根強くあります。19世紀から20世紀前半にかけては軍事力増強にかけての努力が足りなかったため、日本を含む列強に国土を蹂躪されましたが、本来世界ではと言わなくても、アジアにおいては中国こそがその地域の指導的な国家として君臨するのは当然といった気持ち

が強く、現在はそのため

の富国強兵策の遂行に余念がないようにみられます。

このように隣国中国の動きに対して、日本はどのように対処していけばよいのでしょうか。ただ日中友好を唱えているだけでは足元を見られてしまいます。他方日本も軍備増強で対抗するということになると、かつて過ちを犯した道へ再び足を踏み入れることにもなりかねません。日本は今非常に難しい岐路にたっていると思うのです。私はこうした難し

い時代に日本の将来を決めていくには、もつと世界的な視野に立って、日本を取り巻く国際情勢を考えていかなければならないと思います。

日本は今からおよそ100年前当時の帝政ロシアの急速な極東進出で国家存亡の危機に陥りました。明治維新後鋭意国の近代化に努め、軍事力の増強に励んできましたが、日露の軍事力は、極東兵力だけを比べても、未だわが国の方が劣っており、ロシア軍は機関銃のような当時はまだ持っていないような兵器も装備していました。そうした国と戦争をして勝てたのは、わが国の指導者たちが広く世界を視野に入れた周到な戦略をすすめて、世界中の国から色々な形での有形無形の支援を得ながら戦うことができたからに他なりません。その明治の指導者たちが払った血のじむような努力を忘れ、軍事的勝利に有頂天になってしまったところに、その後の破滅への道があったように思えるのです。

日本は周囲を海で囲まれ、世界中の国と交流をしていく上で極めて恵まれた条件下にあります。アジア大陸にある近隣の諸国だけを念頭において付き合おうとすれば、利害の対立ばかりが目立ちかねませんが、太平洋、インド洋の国々からアメリカ、アフリカ、ヨーロッパ大陸の国々に至るまで、極めて幅広く連携を強化し、世界の海洋国家として生き延びていくところにわが国の将来があるように思います。(平成17年 山形県本部での講演より抜粋)

田中義具(たなか・よしとも)  
1935年生まれ。1956年外交官試験に合格、東京大学法学部を中退、外務省に入省。在シドニー総領事、在バングラデシュ大使、軍縮代表部大使、在ハンガリー大使を歴任し、1997年外務省を退官。昭和天皇の大喪の礼では事務局長として大役を果たした。2004年に「小さな親切」運動本部5代目代表に就任。5期10年務め、2014年に代表を退任し、同年顧問に就任、2015年6月に逝去された。

た安保理常任理事国をめざす運動の推移を見ていても、日本がこれ以上国際社会での発言権を増大させていくことを警戒する中国のような競争相手が出てくるようになりました。その動きは、日本の影響力の拡大を阻止する上でもっとも効果的と思われるところに絞って集中的な働きかけを行うなど、これまでのような漠然とした一般的な努力は功を奏しない状況になってきました。日中の対立が